



自転車の行動特性

最近の自転車人気に伴い、自転車が絡む事故も増えています。今回は自転車の行動特性のポイントを確認しましょう。

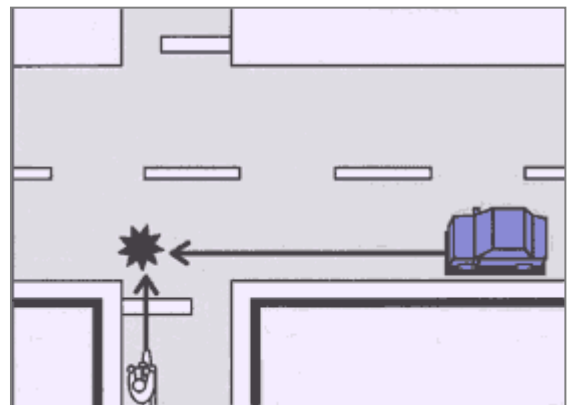
自転車は安全確認が不十分な場合が多い

自転車の行動特性として、「安全確認が不十分な場合が多い」ことが挙げられます。それが事故に結びつく主なケースとしては、次の3つがあります。

1. 見通しの悪い場所から飛び出す

自転車は見通しの悪い交差点を通過するとき、たとえ一時停止の標識がある場合でも、それに気づかなかったり、子どもや高齢者の場合には標識の意味がわからないため、それを無視して安全確認をしないまま道路に飛び出してることがあります。それが出会い頭事故の大きな原因のひとつとなっています。(図1)

図1



■事故防止のポイント

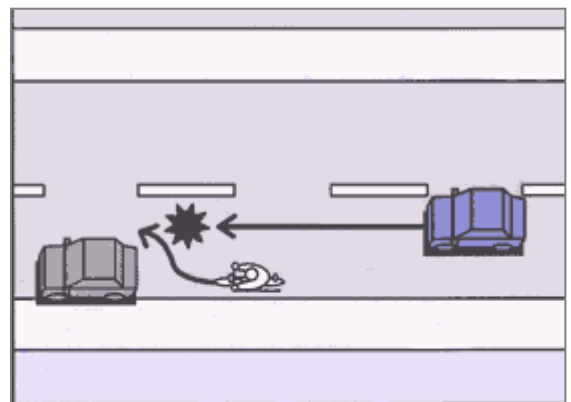
- ・自転車の多い住宅街の道路などを走行するときは、あらかじめスピードを十分に落とす。
- ・1台の自転車が飛び出してきた交差点は、続いて自転車が飛び出してくると考え、スピードを十分に落とす。
- ・小さな交差点やT字路を見落とさないようにする。
- ・一方通行路では逆行して飛び出してくる自転車があることを注意して運転する。

2. 後方を確認せずに進路変更する

道路の左端を進行することの多い自転車は、前方に駐車車両などの障害物がある場合には、後方の確認をせずに急に進路を変更してくることがあります。(図2)

特に高齢者の場合は、身体機能の低下により首だけを動かして後方を確認するということが難しいため、後方の確認をしないまま進路変更したり、道路を横断するという傾向が顕著にみられます。

図2



■事故防止のポイント

- ・前方の障害物などにより自転車の急な進路変更が予測されるときは、スピードを落とし、追い越しや追い抜きはしない。
- ・自転車との車間距離を十分に確保しておく。

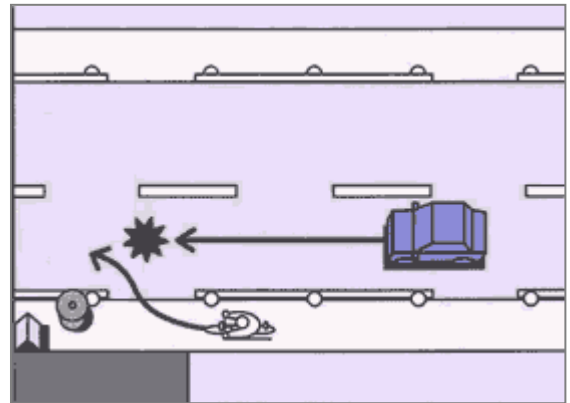
3. 歩道やガードレールから車道へ飛び出す

自転車は歩道やガードレールの内側を進行している場合でも、前方に障害物があって通行しにくいときには、それを避けるために歩道やガードレールの切れ目から、急に車道に出てくる場合があります。(図3)

■事故防止のポイント

- ・ 自転車は歩道やガードレールの内側を進行しているときでも、自転車の動きによく注意する。
- ・ 歩道やガードレールの前方の状況に目を配り、自転車が車道へ出てくることが予測されるときはスピードを十分に落とす。

図3



自転車人気を受け、運転中に自転車と並走する機会が増えています。交通量の多い少ないにかかわらず、自転車の特性を十分に理解し、安全運転を心がけましょう。

(2009年7月作成)